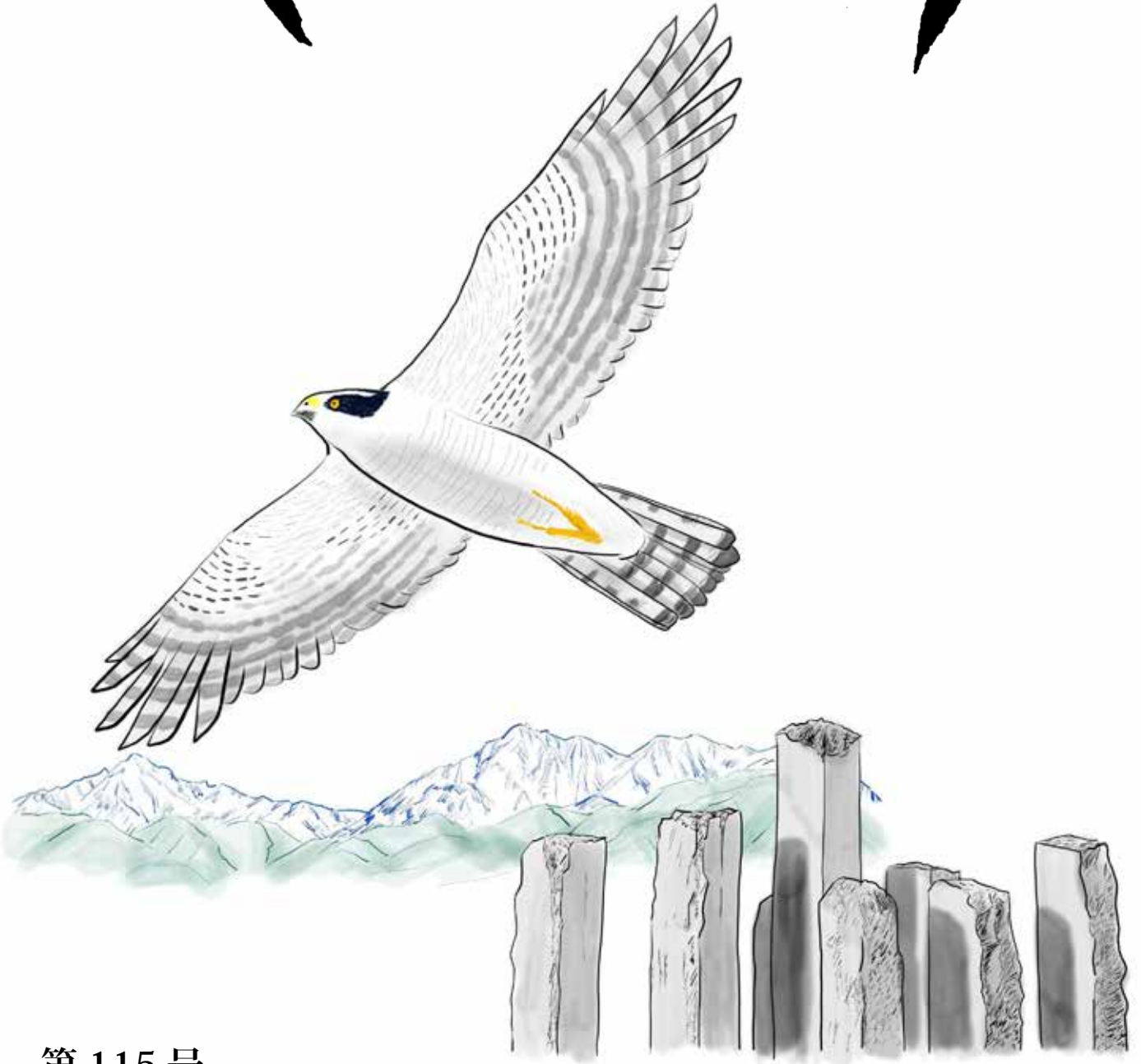


しんせう



第 115 号

2023 年 1 月
日本野鳥の会三重
<http://miebird.org/>



セッカに夢中

伊勢市 中西章

セッカは、春から秋にかけて、河口や河原の草原で「ヒッヒ」「チャッチャツ」と囀ることから、皆さんもよくご存じの身近な鳥といってもいいでしょう。長年気にはしていたのですが、今年の春からこの鳥をじっくり観察してみようと宮川河口（大湊海岸）の草原に2022年4月から9月までの半年間、2～3日おきで通いはじめました。

3月にはヒバリが空中で囀りをはじめますが、4月になるとセッカも負けまいと空中で囀ります。囀りはオスが縄張りを主張することと、巣を作った際にメスを呼び込むためらしいですが、オスは半径150～200mの縄張りの空間をひっきりなしに飛んでいます。この浜では約1kmの海岸沿いを3羽のオスが縄張りを持ってけん制しあっています。繁殖期のセッカのオスは、囀りするのと、口回りが黒いので、メスと区別ができます。



空中で囀るオス

観察していると、オスは空中での囀りだけでなく、クモの糸らしい材料を運び、縄張り内に巣をあちこちに作っているようでした。ちょうど5月15日にNHKの「ダーウィンが来た」でセッカの巣作りが紹介され、オスが器用にクモの糸で草を裁縫する様子が放送されました。この糸はクモの卵(卵囊)をつつむ、べたつかない特殊な糸で、これでないとうまくススキなどの草を編み込めないようです。そして編み込んだ外装巣にメスを呼び寄せ、メスが巣を気にしていると巣材を運び、内装した巣を完成させるということで、実際、オスの作った外装巣にメスが巣材運びする営巣ポイントを数か所確認しました。

目次

セッカに夢中	2
表紙の言葉	2
秋の三池岳	5
大杉谷の鳥類	6
2022年のシロチドリ繁殖	7
鳥類目録の作成作業すすむ。	7
シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化	
—連載第30回 タマシギ—	8
ガンカモ調査始まる	13
タカの渡り 2022年	14
鈴鹿市長がスタジアム建設中止を要請。	15
野鳥記録	16
理事会報告	20
事務局だより	20
探鳥会予告 (2023年1月～3月)	21
探鳥会報告 (2022年8月～2022年10月)	21
編集後記	24

表紙の言葉

オオタカ

四日市市 三曾田明

今回は、「北勢中央公園を舞うオオタカ」です。北勢中央公園では過去、度々オオタカを観察しています。ただ、ここ数年は観察頻度が激減して、ほとんどお目にかかれていません。

それで、脳内にあるシーンを描いてみました。絵ですから、自由自在!! 水のプラザ中央のモニュメントは北勢中央公園のシンボル。その向こうに鈴鹿山脈が見えて…、その上をオオタカが舞う。実際にはあり得ない構図ですが、脳内ではこんな感じのイメージがあるのです。

その後、巣を完成させたメスはおそらく卵を産んで、抱卵期間の2週間後、餌運びするのを見て、ヒナが生まれたのだと確信しました。メスはほとんど声を出さず、「フィフィ」という小さな声を出すのみで、草の上には出てこないので、巣についている個体以外は、メスを見つけることは困難です。もちろん草むらの中での営巣なので、場所は特定できたとしても、刺激せぬよう遠くから観察しました。そしてもうすぐ巣立つかなと思っていた矢先、メスの餌運びがなくなったので、おそらく外敵に巣が襲われたでしょう。巣立ちまでの繁殖は難しいようで、なかなか幼鳥の姿を確認できません。

ところが、7月に入って放棄したと思っていた営巣ポイントから、幼鳥が顔を出しました。しばらくは草むらの中で親から餌をもらっているようで、簡単に姿は見ることはできませんが、1週間もすると近距離を飛ぶようになり、オスから追いかける姿も確認できました。この時期に3か所で10羽ほどの幼鳥を確認しました。4月からこの間、オスは子育てにはいっさい参加せず、ずっと縄張り内を空中で囀りながら、いまだにあちこちで巣を作っているようです。



口周り黒いオス



糸を運ぶオス



巣材を運ぶメス

セッカは一夫多妻制だといわれていますが、メスがたくさんいるわけではなく、繁殖に失敗しても、次の準備のために、オスはずっと巣作りをして、子孫を残す方法をとっているのでしょう。オスが頑張っただけで巣作りしている割には、繁殖率はあまりよくないように思いました。

8月に入ると3羽いたオスはいつの間にか1羽になり、広大な縄張りを相変わらず飛び回っていますが、肝心の餌を持ったメスは見かけなくなり、当地での繁殖活動としては一段落したかもしれません。幼鳥のオスは、群れで行動するようで、当地でも3羽から5羽くらいの群れで、草の上に出ると「チッチッ」というアオジの地鳴きのような声から見つけることができます。おそらく幼鳥たちが鳴き交したりして、コミュニケーションをとっているのだと思います。幼鳥のメスは、さすがに1か月で繁殖個体となるメスは当地にはいないようで、目立つ行動をすると成鳥のオスに追いかけるので、草むらの中にいることが多いようです。

そして9月にはオスの囀りも聞こえない、ひっそりとした草原に戻りました。成鳥のオスは縄張りを主張することがなくなり、換羽に入ることもあって、ひっそりと草むらの中で過ごしているようです。幼鳥のオスは成鳥のオスに追いかけることもなくなったので、頻りに群れで姿を見せるようになり、成鳥よりも幼鳥のほうが見つけやすくなりました。幼鳥の行動範囲も広がり、対岸の中州の草むらまで移動したりしています。ただ幼鳥もだんだん警戒心が強くなり、顔を出してはすぐ草むらに隠れるので、簡単に近寄れなくなりました。



餌を運ぶメス



幼鳥が顔を出す



幼鳥同士の遊び

このように約半年間にわたるセッカの観察で、ごく身近で見られる普通種の鳥でも、様々な発見があり、あらためてその不思議な生態に感心しました。いった

ん9月末までの報告とさせていただきますが、今後当地で越冬するか見届けたいと思っています。

秋の三池岳



志摩市 濱屋 勝則

2022年10月29日(土) 晴れ

7:47 八風キャンプ場奥の駐車場をスタート
7:52 三池岳登山口
10:15 中峠、10:35 北仙香山、10:55 八風峠
11:07 三池岳山頂(974m)
13:57 三池岳登山口
13:28 八風キャンプ場奥の駐車場

前回は初夏に登りたくさんの野鳥にも出会えましたが、この度は風の強かった影響も有り飛び交う姿なども見られず、茂みの中から何種類かの声を聞くのみでした。しかし、季節は秋と言う事で樹木の葉は鮮やかに色付き紅葉が進んできれいに見て取れました。



鳴き声や姿を見られた野鳥 : コゲラ、カケス、エナガ、ハシブトガラス、ヤマガラ、メジロ



大杉谷の鳥類について紹介したいと思います。私は現在、八ヶ岳の南麓（長野県の諏訪地域）に住んでおり、山梨県の大学で非常勤講師として働いています。甲信地方に20年ほど住んでいますが、実家は大杉谷にあり、いまも5月や12月には帰省しています。

小学校3年生から鳥の観察を始めました。児童数の少ない学校で、理解のある担任の先生に恵まれたこともあり、鳥の観察に多くの時間を使うことができました。2008年には、1991年から2006までに大杉谷で観察した鳥類をまとめました（Strix Vol.26）。調査の範囲は、宮川ダムから北東（下流方向）に直線で6.3kmと、上流の大和谷、水呑峠までの車道沿いです。



カワアイサ（2021年12月31日）

ライフワークであるイワツバメやホシガラスの調査のほか、亜高山帯の鳥類群集や種子散布、小鳥類の渡り調査などをおこなっていますが、自分の住んでいる場所や出身地にどのような鳥類が生息しているのかということにも関心があります。そのため、帰省したときには鳥の記録を取るようになっています。2008年の報文では、15年間に大杉谷で確認した34科82種の鳥類を報告しました。繁殖期および非繁殖期を合わせた優占種は、ヒヨドリ、ヤマガラ、メジロ、ウグイス、カケス、エナガ、カワラヒワなどでした。調査地は常緑広葉樹の多い植生で、車道や人家周辺などの開けた場所によく観察される鳥が記録できる傾向にありました。

確認された82種のほかに、今回の調査範囲外ではサンショウクイ、マミジロ、トラツグミ、メボソムシクイ、エゾムシクイ、サンコウチョウを

観察しています。また、これら以外に「宮川村史（1994年）」にはコノハズク、アオバズク、ヨタカ、ブッポウソウ、ビンズイ、コマドリ、キバシリの記録があり、知人はオオコノハズクを確認しています。さらに、新聞には宮川ダムで保護されたオオミズナギドリと思われるミズナギドリ類の写真が掲載されていたこともありました。

15年間の調査で、個体数に変化のあった種はイソヒヨドリ、コシアカツバメ、イワツバメ、スズメ、ドバト、ソウシチョウなどでした。印象に残っているのは、1992年にオオワシ、オジロワシ、ヤツガシラを観察したこと、1998年にオオアカゲラとイワツバメの繁殖を確認したこと、ウメの花を食べるアオバトを見たこと、ヤマセミやカワセミの巣を見つけたことなどです。

2007年以降は新たに、カワアイサ、ハイタカ、ハクセキレイなどが記録されました。ハクセキレイは2010年1月と2011年10月の2回のみで、その後は観察されていません。カワアイサは2011年ごろから見られるようになり、近年、個体数が増えているように思います。



イソヒヨドリ（2012年12月31日）

他には、2006年12月にイワツバメの越冬が確認されたり、キバシリが標高200m付近に普通に生息していたり、スズメの個体群が消滅したということがありました。イソヒヨドリは繁殖をするようになり、定着しています。大杉谷では、市街地で普通に見られるムクドリはこれまで1度も観察されていません。亜種リュウキュウサンショウクイも注意しているのですが、見つかっていません。今後も、大杉谷の鳥類を記録していきたいと考えています。